

皆さん、こんにちは。本日、京都造形芸術大学の学長に就任した尾池和夫です。歴代の学長が築いて来た伝統を守り、発展を旨として、力の限りを、この大学に注入する決意です。教職員の皆さま方へ、ご支援とご協力をお願いします。

俳句では、今日を四月馬鹿という季語で詠みます。万愚節という季語もあります。ヨーロッパ起源の風習で、日本には大正年間に伝わりました。

四月馬鹿桃流れくる筈はなし 星野麥丘人  
万愚節に恋うちあけしあはれさよ 安住 敦  
万愚節跳べそうに水ひかりおり 高橋由紀夫

私たちは虚と実の世界にいます。一句目は物語の虚を詠み、2句目は人びとの暮らしの中の虚と実を、3句目は未来の虚実の世界に向かう今を詠んだものです。

今、挨拶で嘘を言おうとしているではありません。芸術とは何か、人とは何かを考えるためのヒントを、これらの句から得ようとしているのです。芸術は壮大な虚の世界かもしれないと思ったからです。

エイプリルフールが伝わるより前、明治の初め、西洋から一挙に多くが輸入され、日本の学術と芸術に影響を与えました。西洋の科学と技術は、日本の学術の世界を凌駕し、それに日本人も多くの貢献をしました。例えばノーベル賞にその結果を見ることができます。科学はひたすら物事を見つめて考えますが、技術は、ひたすら合成し、あるいは分解して新しい物を産み出します。しかし技術は、ときに大きな悲劇を生み出しました。福島原子力発電所に、あまりにも重い実例を見ることになりました。

芸術の世界では、洋画や西洋音楽が大きく取り入れられましたが、日本の伝統的芸術はそれらと共生しつつ伝統を守り、しかも西洋に大きな影響を与えるという歴史をたどりました。

昨年12月、この大学の顧問に就任して以来、できるだけキャンパスを訪れて学習しました。井上安寿子さんの第一回葉々の会、千住博さんの卒業展キャンパスツアー、通信教育部の卒業制作展、また2つの卒業式など、それらのすべてが本当にすばらしく、この大学の魅力をしっかりと感じ取りました。その体験から、芸術とは何か、人とは何かという命題を置いて、考えるようになりました。

今日、広報担当の方々の努力で、本学のウェブサイトの更新が大々的に行われました。さっそく皆様もご覧になったことと思います。最初に申しあげた私の決意がそこにあります。掲載されている所信をお読みいただきたく存じます。そこにあるように、徳山詳直理事長が高らかに描いた「京都文藝復興」の本学の基本理念にあるごとく、芸術文化探求へのとどまることのない研鑽が、人類の未来を希望あるものへ導くと信じて、今日、私もこの大学の学長に就任しました。

今までにお付き合いのある各界の方たちから、私にお祝いのメッセージをいただきました。その中で、犬山の京都大学霊長類研究所にいるチンパンジーのアイが、私のために新しく絵を描いて贈ってくれました。その絵を今日から始まった「春の顔見世展」に出品してあります。それを見て、「芸術とは何か、人間とは何か」ということを一緒に考えてほしいと思っています。アイがその絵を描く場面を、動画でお見せしています。松澤哲朗さんと齋藤亜矢さんの提供です。

私は、地球科学の視点で、芸術とは何か、人とは何かを考えてみたいと思っています。皆さん方は芸術の世界から、それをさらに考え、議論してほしいと思います。

教職員の皆様の支援をいただきながら、芸術立国を旨とすることを約束して、私の就任の挨拶といたします。よろしくをお願いします。